

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	佐藤 奈穂
論文題目	カンボジア農村における死別・離別女性の研究 —親族ネットワークと生計維持戦略—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、カンボジアにおける女性世帯主世帯の貧困割合が男性世帯主世帯より低いという多くの研究結果を起点として、夫と死別・離別した女性 (現地語でメーマイ) が、なぜ夫を失くしたにもかかわらず貧困に陥らずに生活していけるのかについて、資産獲得、所得・就業、子や老親の扶養の3つの側面を分析し、個人・世帯という単位に加え、世帯を超えたネットワークの機能に注目することによって答えようとした研究である。</p> <p>本論文は、2006年11月から2007年11月にかけて行った質問票による世帯調査を中心として、筆者がカンボジア一農村においてたびたび実施した住民と一緒に同じ生活しながら行う農村調査に基づくモノグラフである。</p> <p>本論文は、序に続いて第一章から第五章まで、および結語よりなる。</p> <p>序および第一章において、本論文は「貧困」のうちの、「所得貧困」にならないで「リスクに対する脆弱性」に注目し、夫を失くすというリスクに女性自身や農村社会がどのように対応し、所得貧困をいかに回避しているのかを検討することにより、所得貧困だけではなくより広い人間貧困への理解に迫ることを論文の目的として設定している。そして、「女性世帯主世帯」が開発行政の枠組に由来する言葉であるのに対し、「メーマイ」という、カンボジア社会に根ざした概念を用いることにより本論文は、カンボジア社会のより深い理解と「女性世帯主世帯分析」を社会のより広い文脈におき、生活の基盤を支える社会関係の理解を目指すとしている。</p> <p>第二章は、人口・世帯構成などの調査地の概要と調査方法を述べ、調査対象204世帯のうちメーマイが60世帯に67名存在し、その内、夫が死亡した時点で末子が15歳以上であったケース9世帯12名を除く、51世帯を主たる分析対象とする旨が述べられ、また調査村地域では婚姻に際し、妻方居住の傾向が強い点が述べられている。</p> <p>第三章は、離別・死別時の資産分割と相続について述べている。論点として、メーマイを含む女性全般について、資産の生前分与・相続において不利な状況にあるのか、離別・死別時にメーマイは資産を確保できているのかを論じている。そして、離別時は、妻が親から相続した資産はそのまま妻のものである一方、結婚後に獲得した資産は夫婦で二分していること、また死別後の夫の資産、および結婚後に獲得した資産はメーマイのものになることが明らかにした。さらに、親の資産は親が亡くなる前に同居する子に相続される傾向があり、メーマイは親と同居する例が多いため、その場合、より多くの相続を得ることが明らかにした。</p> <p>第四章は、所得と就業構造に関する章である。論点として、夫を持たないメーマイ</p>			

は母子家庭で1人で就労し家計を支えているのか、また、どのようなメーマイが貧困に陥りやすいのか、その原因は何か、を論じている。そして、メーマイが親やキョウダイと共に世帯を形成する傾向があることを指摘し、世帯内労働力、所得構成と生業の特徴、就業構造、農外所得、出稼ぎなどについて、メーマイ世帯と一般世帯との比較研究を行っている。

第五章は、子供と老親の扶養を論じている。メーマイは一人で子を養育するのか、また親の扶養負担を負っているのか、を論点にあげている。そして、子供が世帯間を移動する様々なケースがあることを明らかにしている。それらを検討した結果、子供の移動先の世帯が養子として子供を扶養する場合もあるが、子はあくまでも実親の子でありながら一時的に就寝や食事場所を移動先に移す例が最も多かった。そのことは、親族世帯間の所得の高い世帯から低い世帯への一時的な所得の再分配、親族世帯間の雑務労働の調整、子供の就学を継続させ、将来所得を上昇させている。そして、子は実親のみが育てるのではなく、親族のネットワークが皆で扶養する規範を持っていることが明らかとなった。これらは、総じて貧困に陥りやすいメーマイが働きながら子をいかに扶養していくのかという問いに対する答えになっている。

最後にまとめにおいて、夫を失くすというリスクに遭遇したカンボジア女性は、アメリカや日本の死別・離別女性より、生活基盤を確保するための選択肢をより多く有しているとの自説を展開している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、東南アジア農村において世帯の 10 から 25 パーセントの割合で見出される重要な社会層でありながら、これまで包括的な調査研究の対象にならなかったことがない女性世帯主世帯を研究している。その中のカンボジアにおいて、現地語で「メーマイ」と呼ばれる死別・離別女性を研究することにより、当該社会のコンテクストに沿った分析とその社会的特質の把握に成功している。そして、カンボジア女性が夫を失くすというリスクにどう向かってどのように貧困を回避してきたのか、それを可能にしたカンボジア社会の特徴とその対応の限界とともに明らかにした。

本論文によって明らかになった新たな知見は以下の通りである。

第一に、死別・離別女性、ないし女性世帯主世帯について、資産獲得、所得・就業、子供と老親の扶養の三点、すなわち、いかに資産を獲得し、いかに稼ぎ、いかに育てるのかを研究することにより、どのように所得貧困とリスクを回避しているのかを明らかにする研究枠組みを提示したという点である。これは、他の東南アジア地域、さらに他地域における死別・離別女性研究に応用が可能である。

第二に、カンボジア農村が世帯構成の柔軟性をもち、メーマイが夫と死別・離別した際に親やキョウダイと同居することにより労働力を確保し、世帯の安全や精神的支えを得ていること、そしてこのような世帯の再編成により、母子世帯となることを回避し、夫の不在がリスクとして顕在化しない構造があることを明らかにした。

第三に、子と老親の世帯間移動が柔軟に行われることにより、メーマイは働くが子や老親の扶養は親やキョウダイ間で調整する、いわば子や老親は親族で扶養するという扶養規範が見られることが明らかになった。

第四に、土地相続の慣行により、夫との死別・離別に際して土地資産の分与・相続においてメーマイが不利になる状況は見られないという点が明らかになった。すなわち、夫を失くしても住む家や耕す土地、その他の資産を失わないのである。

第五に、食料関連の生業は女性の職域として確保され、自営業の起業は容易であること、およびメーマイが親・キョウダイと同居することにより、家事と夫に縛られない都市部への就労＝社会進出が可能になっているという点を明らかにしている。

第六に、子や老親の世帯間の移動という親族ネットワークによる互助・支援機能は、これまで親族間の金銭の貸し借りなどがみられないことから個人主義的であると言われ、互助機能が弱いとされてきたカンボジア農民や農村に関する新たな知見である、という点を提示した。

第七に、個人や世帯のみを単位とする従来の分析では明らかにできなかった事実として上記の世帯の再編成や子や老親の移動を支えるネットワークを明らかにした点である。この親族ネットワークは、世帯に対するあらかじめ用意された調査票を用いた調査だけでは明らかにすることが出来なかったであろう。そして、本論文はこの親・キョウダイの親族ネットワークを一つの家族圏ととらえ、その家族圏のもつ互助

機能を明らかにした。

第八に、以上の互助機能をもつ親族ネットワークは親・キョウダイの範囲に限られるため、何らかの事情でそれらから支援を得られない場合は、幼少の子供を抱えた母子世帯は貧困に陥る可能性があるという、親族ネットワークによる互助機能の限界を指摘した。

以上、本論文は、東南アジアにおける死別・離別女性、あるいは女性世帯主世帯に関するはじめての包括的な研究であり、カンボジア農村に関し多くの新たな知見をもたらした。その学問的貢献は明瞭である。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。